ラフカディオ・ハーンのニューオーリンズ

＜再・創造＞の起源へ

梅垣昌子

ニューオーリンズにおけるハーンの修業時代

ラフカディオ・ハーン（Lafcadio Hearn, 1850-1904）は 1890 年の来日前、アメリカ南部を拠点に文筆活動を行い、膨大かつ多様な文章を新聞等に寄せるとともに、長編小説 2 編を刊行している。具体的には、1869 年に 19 歳で渡米後、オハイオ州シンシナティで日刊紙に雇われるようになるが、27 歳でニューオーリンズに居を移すと、*Daily City Item* をはじめ各紙に記事を掲載して名を上げた。この間、フランス文学を翻訳し、地元のクレオールの民話や伝承の採集に取り組んでいる。ハーンのアメリカ時代について記したエドワード・ティンカーは、ハーンにとってニューオーリンズの 7 年間はいわば修業時代であり、ここにおいて彼の文章の技法が完成したという見解を示している。

ハーンにとって、ニューオーリンズとはどのような場所だったのだろうか。ハーンがニューオーリンズについて書いた複数の文章が、ニューオーリンズの *Daily City Item* 紙や、彼がそれ以前に滞在していたオハイオ州の *Cincinnati Commercial* 紙に掲載されている。1978 年 11 月 26 日付で *Daily City Item* に寄せられた "The Glamour of New Orleans" においてハーンは、クレオールの街を次のように描写している。

> And then, the first impression of the old Creole city slumbering under the glorious sun; of its quaint houses; its shaded streets; its suggestions of a hundred years ago: its contrasts of agreeable color; its streets re-echoing the tongues of many nations; its general look of somnolent contentment; its verdant antiquity; its venerable memorials and monuments; its eccentricities of architecture; its tropical gardens; its picturesque surprises; its warm atmosphere, drowsy perhaps with the perfume of orange flowers, and thrilled with the fantastic music of mocking-birds –can not ever be wholly forgotten. (Hearn [2009] 709-710)

このようにハーンは、色彩、空気感、聴覚に訴える心地よい音などをまじえて、手際よく読者の五感に訴えることで、南部のコスモポリタンの街ニューオーリンズの独特の風土への巻き込みをはかり、実況中継のごとく、流暢かつ雄弁に街を活写している。

ハーン同様、ニューオーリンズで修業時代を過ごした作家に、「失われた世代」のウィリアム・フォークナー（William Faulkner, 1897-1962）がいるが、街の捉え方は対照的である。フォークナーは街の名をタイトルに掲げたエッセイ風の小品を執筆しているが、その中でニューオーリンズを高級娼婦にたとえ、神秘的な誘惑と結びつけて表現している。しかしその筆致は観念的であり、具体的な街並みの描写は見られない。両者の比較を通して、五感の反応を引き出すハーンのジャーナリスティックな文体の特徴が相対的に浮かび上がってくる。この手法には、のちの『怪談』（*Kwaidan*, 1904）における語りの身体性の萌芽が認められる。ところでフォークナーは、上記小品において、フランスの芸術至上主義者のテオフィール・ゴーティエ（Théophile Gautier, 1811-1872）の作品から引用を行っている。ハーンもまたゴーティエに注目しており作品を英訳している。この点には両者共通の志向が観察される。ニューオーリンズの文学的土壌が芸術家にとって強力な触媒となり、文筆のキャリアの初期において、それぞれの個性を引き出す重要な要素となったことは間違いないであろう。

「再話」文学の萌芽とニューオーリンズ

フォークナーはニューオーリンズにおける修業時代、シャーウッド・アンダソンと交流し多大な影響を受けたが、ハーンもこの街で多くの知己を得た。ニューオーリンズにおいてハーンは、文学史上に名を残した人物たちと接触したのである。フランスやスペインによる統治をへてアメリカ合衆国の一部となったニューオーリンズには、カリブ海経由の黒人文化も流入した。多様なエスニシティを包含するこの「異郷の街」に、内外の文人たちが多く引き寄せられた。その様子を記したアラン・ブラウンによれば、『グランディシム一族』の作者であるジョージ・ワシントン・ケイブル（George Washington Cable, 1844-1925）の住居には、オスカー・ワイルドやマーク・トウェインが訪れており、ハーンもまたここで、ジョエル・チャンドラー・ハリス（Joel Chandler Harris, 1848-1908）に出会ったという。ハリスは黒人の伝承にもとづく再話文学を出版した人物だが、彼はハーンによるゴーティエの翻訳を賞賛したという。

ハーンは *Daily City Item* に発表した 1880 年 11 月 27 付の "The Original Bras-Coupé" と題された文章の中で、ケイブルの『グランディシム一族』に言及している。

> While reading Mr. Cable's eloquent novel *The Grandissimes*, many Southern readers have doubtless asked themselves: Was there ever a Bras-Coupé? And is it possible that such a tragedy occurred in Louisiana? The story is founded on facts; but the author took the poet's license and used it to advantage. He made Bras-Coupé great, valiant, large-hearted; --a savage prince fighting for liberty against the whole force of civilized community, with such weapons as nature had given him. The artistic effect is superb; and the figure of Bras-Coupé towers up above the dramatic persons of the novel like a statue of black basalt, with that weird grimness which Egyptian sculptors gave to their colossi. But the original of the story was a less epic hero and a more human one, ... (Hearn [1929] 58)

ケイブルの物語ではブラ・クペ、すなわち「切断された腕」という渾名の登場人物を元アフリカの王として描いているが、彼の腕は両方とも健在であり、その名は象徴的な意味で使用されている。これに対してハーンは、本当のブラ・クペの民間伝承はまた別であるとして、白人からの攻撃をうけて腕を失った逃亡奴隷のエピソードを書き取っている。

ハーンはニューオーリンズ滞在中に、「ヴードゥー・クイーン」として知られるマリー・ラヴォーのもとを訪れて話を聞き、その死に際して追悼の記事を書いたが、その中で、彼女が薬草を用いた民間療法により多くの人々を救ったことに触れている。ハーンはまた、1885 年 11 月 7 日に *Herper's Weekly* に寄せた "The Last of the Voudoos" において、ヴードゥー・ジョンと呼ばれた黒人男性の波瀾万丈の一生を綴っている。この文章には、周縁の人々の存在を抑圧も等閑視もせず、むしろ好奇心を入り口として向き合い観察し、身体性のある言語で共感力の伝播まで引き起こすという、ハーンの貴重な特質が発揮されている。のちに 37 歳のハーンはカリブ海に浮かぶマルティニーク島に渡り、ヴードゥーの物語を採集することになる。

ハーンの＜再・創造＞の底流と深化

20 歳になるまでに、ヨーロッパの南から北までの多様な風土のなかで育ったハーンにとって、新世界アメリカにおいて、アフリカ系の文化の精神世界に出会ったことが、のちの『怪談』を生んだハーンを形作る重要な布石となったと考えられる。ハーンの『怪談』の読解を通して、アフリカ古来の自然崇拝と日本の霊性ないし精神世界が、その底流に共通の水脈をもつことが実感されるのである。祖先崇拝や呪術的な慣習という観点からも、人間精神のプリミティブな部分が、ハーンの異化効果の目を通して浮かび上がってくる。まさにハーンの創造力は、グローバルな規模で飛翔を遂げたとみることができる。具体的には、『怪談』に収録された、たとえば「鏡と鐘」（"of a Mirror and a Bell"）という物語のなかに、その重要な片鱗を見ることができる。

『怪談』の語りの力、あるいはハーンの「再話」の力には、その基盤に三つの力が潜んでいる。それは第一に、社会の周縁で生きる人々へのまなざしであり、繊細かつ強力な共感力がそれを支えている。第二に、口承文学の語りの身体性。ハーンの語りは五感を揺さぶる語りということができる。第三に、見えない存在の可視化、あるいは異界との接続の想像力。具体的には、同一空間に無限の時間軸を重ねて、そこに幻視をみるという、柔軟で自由な思考が前提となる。これらすべてが、ハーン晩年の『怪談』に結実している。ニューオーリンズでの体験は、ハーンのその才能と創造力を開花させる重要な契機の場となった。

主要参考文献

Brown, Alan. *Literary Levees of New Orleans*. Montgomery: Starrhill Press, 1998.

Cable, George Washington. *The Grandissimes: A Story of Creole Life*. Penguin Books, 1988.

Faulkner, William. *New Orleans Sketches*. Ed. Carvel Collins. Jackson: University Press of Mississippi, 2002.

Hean, Lafcadio. *Essays on American Literature*. Ed. Sanki Ichikawa, with an introduction by Albert Mordell. Kanda: Hokuseido Press, 1929.

Hean, Lafcadio. *KWAIDAN: Stories and Studies of Strange Things*. Charles Tuttle, 1971.

Hearn, Lafcadio. *Lafcadio Hearn: American Writings*. The Library of America, 2009.

Hearn, Lafcadio. *Two Years in the French West Indies*. New York: Interlink Books, 2001.

Kemme, Steve. *The Outsider: The life and Work of Lafcadio Hearn*. Tuttle Publishing, 2023.

Ward, Aartha. *Voodoo Queen: The Spirited Lives of Marie Laveau*. Jackson: UP of Mississippi, 2004.